

## 徳島県慢性期医療学会 演題・抄録登録フォーム

施設名	法人名	医療法人 凌雲会			
	施設名	稲次整形外科病院			
	所 属	リハビリテーション部			
発表者	姓			名	
	ふりがな	きむら		たかひろ	
	氏 名	木村		敬弘	
	職 種	作業療法士			
共同演者	氏 名		ふりがな		職 種
	姓	名	姓	名	
①	一宮	晃裕	いちみや	あきひろ	理学療法士
②	土井	大介	どい	だいすけ	理学療法士
③	稲次	正敬	いなつぎ	まさのり	医師
④	湊	省	みなと	あきら	医師
⑤	稲次	圭	いなつぎ	けい	医師
⑥	稲次	美樹子	いなつぎ	みきこ	医師
⑦	高田	信二郎	たかた	信二郎	医師
⑧					
⑨					

演題名現在文字数 22

演題名	座位時の抑制がADL改善に及ぼす影響について
抄録本文	本文現在文字数 1122
<p><b>【はじめに】</b>                  当院の回復期病棟では自己能力の認識が乏しく、転倒リスクが高いにも関わらず一人で椅子から立ち上がったたり、歩行したりする患者に対して座位時に抑制目的のベルト(以下抑制ベルト)を着用することで転倒を防いでいる。しかし、抑制ベルトを着用された患者は着用しない患者と比べてADLの改善が遅れがち印象を受ける。そこで今回、座位時に抑制ベルトを着用することがFIM効率に及ぼす影響について検証した。</p> <p><b>【対象】</b>                  平成27年1月1日～平成29年3月31日の間に当院回復期病棟を退院された患者の中から状態の急変などにより死亡、転院等で退院した方を除き、CPS3～5点以内、標準型車椅子や椅子で座位姿勢のとれる65歳以上の患者65名(男性8名、女性57名)。</p> <p><b>【方法】</b>                  座位時に抑制ベルトを着用した群を抑制群、着用しなかった群を非抑制群とし、それぞれの群におけるFIM効率の差を比較検証した。比較にはMann-WhitneyのU検定を用い、有意水準は5%未満とした。統計解析にはJSTATを用いた。また、抑制群では着用後1週間以内に夜間不穩が増えた患者と食事摂取量が低下した患者の人数を集計した。</p> <p><b>【結果】</b>                  抑制群と非抑制群のFIM効率において抑制群:中央値0.301±0.394点、非抑制群:中央値:0.414±0.451点と抑制群が非抑制群に比べ、FIM効率が有意に低い結果となった(p&lt;0.05)。運動項目のFIM効率でも抑制群:中央値0.278±0.38点、非抑制群:中央値0.357±0.412点と抑制群が非抑制群に比べ、FIM効率が有意に低い結果となった(p&lt;0.05)。認知項目のFIM効率では抑制群:中央値0.000±0.04点、非抑制群:中央値0.016±0.097点とFIM効率に有意な差を認めなかった。また抑制群の60.9%に夜間不穩が増加し、76.2%に食事摂取量の低下がみられた。</p> <p><b>【考察】</b>                  今回の結果より抑制ベルトを着用することでADL改善を遅らせる可能性があることが示唆された。運動項目で有意差が見られた背景にはベルトにより自由な行動を制限されることで立ち上がる回数が減少し、日常生活場面での筋力やバランス能力を向上させる機会の低下に繋がったと考えられる。また抑制群における夜間不穩の増加、食事摂取量の低下が見られたことを考えると、行動制限により日中の活動量が低下した結果、睡眠量の低下や食欲の低下等、ライフサイクルにも悪影響を及ぼしたのではないかと考えられる。抑制はやむを得ない状況において行われる安全確保のための手段ではあるが、本研究の結果を踏まえて今後の回復期患者の抑制の有無を検証していく必要がある。</p>	